CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kumamoto University Repository System

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	古き調 ： 文苑
Author(s)	白月
Citation	龍南會雜誌，１２３： ６８-７０
Issue date	1907-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6080
Right	

Kumamoto University

東屋の南窓
紫檀のにをう文机に
君や凭れてふくよかの
圓ら玉首の眞玉手に
馨りは高き唐墨を
赤間關硯に當てつらむ。

紅葉流るゝ透かし画の
卷紙さらと擴げては
よき歌もがと項曲げ——
多澤の前髪搖れにけむ。——
筆の穂さきをみつむると
鳩の瞳ぞ忍ばるゝ。

折々もらす、ため息は
鬢の後毛ゆらがして
餘りは紙に戰ぎけむ
牡丹と匂ふ唇に

印紙、封じ目、——當時の
接吻のごと、——觸れにけむ。

燒くに躊躇う夕かな——
涙し流る徒らに。
夢か文がら火にすれば
薄霧落ちて低く這ふ
煙の末の立ち姿——
抱けば消ねて三ヶ月の影。

古き調

白月

月清く
松風くらき磯づたひ
たもわ背むけて行くは誰ぞ
戀ならば
母や待つらんとく歸れ

近くは家も見ねざるに　しわざおれ
世をすねて　たゞたはぶれの
月を追ひゆく途あらば　すさびとて
語れやきかん君がうへ　かろくふきたる
戀と見て　そやなれど
咎めん人のきたりおば　ほそきやじりは
可笑からずやたわやめよ。（磯づたひ）、　するどくも
○　かよはきむねを
こしばがくれを　つらぬけり
よろ〳〵と　むねのにこげの
よろぼひいでし　ふかければ
こすゞめの　ちゝほのいろは
むねにさゝりし　みねずとも
ふきやこそ　うけたるきずの
わがつみふかき　いつのひか
いねんとすらん

こすゞめよ（こひ）

○

百合、くろがねの花散りて
いづみのうたも、老去れば
くさ野にこもるおつひめが
樹かげのゆめのくつがへり
みくるまとほくれもむろに
ゆうべのくもにまぎれいり
いつとしもおきほがらかの
秋のけはひはせまりきぬ

うみはしらべをあらためて
やまはよそほひかへつべし
あゝ、百川のひゞきだに
いつ〳〵かさびて濃みどりの
そらゆくかせのあけくれに
ことある味をもたらして
なみにまぎるゝいそ寺の

暮鐘の冴ねもれのづから——

ぶどうのふさはむらさきに
その〻葉がくれ露はらみ
むねの和毛はしらも〻の
はなにも似たる小羊の
牧場のむれはあたゝかき
夢こまやかにやはらぎの——
さらばうたはんまき人の
音はほそくとも秋のうた

現、たちつくすくさの野に
みつるよ、清きさゝやきの
秋が、のりこし白駒の
黄金ぐつはの、ひゞき音か
芦のふねの音、まきのうた
葉ずれのゆやぎ、虫のこゑ
こりてすゞしくあめつちに
とよもゝわたる秋のこゑ聲（秋のうた）